

る。倒立洋梨型である。基部の周邊には 3~5 個の乳頭状凸起がある。本品をチチナス（乳なす）と新稱するに致つたのはこの形狀に起因する。其後佐藤正己博士の示教により三木末武氏著南方農業紀行（昭和 19 年）にアート刷圖版があり既にキツネナスの和名が與へられていることを知つた。

○伊豆天南星について（倉田 悟） Satoru KURATA: On *Arisaema izuense* Nakai.

イズテンナンショウは伊東南方の一碧湖畔にて岸田松若氏により發見されたもので、其後他處に產するの報を聞かぬが、杉本順一氏は既に古く下田及び天城產を報じて居られる（植物界 1-1: 4.）。賀茂郡南中村所在の東京大學樹藝研究所附近にも極く普通に見られ、四・五月ともなれば、附近の高所に生育するホソバテンナンショウの瘦軀に對比して、それより下方に本種が丈の低い割に巨大な濃紫花を葉隠れに開いて居る。又、仁科村大城峠より掘り來つた天南星が東京で開花したが、これも伊豆天南星であつた。かくしてこの天南星は南伊豆には廣く產すると思われる。

本種は偽莖稍々短かく（10~30 cm），花梗超出部も短かい（3.5~8 cm）點が良い特徴で、花序附屬物の頭部は著しく膨大する事多きも、細いものでは巾 1 cm 前後である。小葉縁は普通全縁であるが鋸齒を有する個體もある。又、通常は一葉のみ發達するが、屢々二葉を出し、こうなると杉本氏が比較されし如くオオマムシグサに似たものとなり、小葉數の多き事（9 枚以上）、球根に珠芽を生ぜぬ點等により、ヒロハ天南星、蘆生天南星の群よりもオオマムシグサの群に入る事が分る。しかし別に伊豆にも天城山の一部にヒロハ天南星群のヒメ天南星に近縁なる一種が自生する事は注目すべきである。

○ギンサカズキとは（久内清孝） Kiyotaka HISAUCHI: Japanese name of *Nierenbergia rivularis*.

夏から秋にかけてさく外來の小草でギンサカズキという草のあることを教えられた、これは東京のことである。小さなナス科の觀賞植物で、莖は地上を横にはい杓子狀の葉を出し、ところどころから、花筒の細ながくのびた徑 2 cm 位の白花がさく。その状洋食の折に出る腰高のコップの様である。その爲英名は White cup という。南米アルゼンチン原産で *Nierenbergia rivularis* Miers といわれている。この草に英名に因んだかどうか知らないがギンペイソウ（銀杯草）という名がいつのころからか出來た。それが恐らく漢字名でつたわつて行く内に趣味の高い人が訓よみにしたものと思われる。石井勇義氏の園藝大辭典やその他のその道の本にはいずれもギンペイソウとしてある。どちらが雅名であるかは別として、名稱は一本にして貰わないと迷わくを人に及ぼすことになる。序ながら寺崎留吉氏はこれに同屬のアマモドキの學名と和名とで圖説し、ギンペイソウを別名としているが、これは故人がうつかり書き誤つたものである。地下の同氏、もっていかんとなす。